

宗岡二中だより 6月号



令和6年6月3日

自ら学び考える生徒
学校教育目標：心豊かな優しい生徒
明るく元気な生徒

目を前にみて心を後ろに置き

校長 伊藤大輔

室町時代に能楽を大成した世阿弥は、その極意を「花鏡(かきょう)」という書物に込めました。その中に「離見の見(りけんのけん)」という教えがあります。これは独りよがりになってはいけない、おのれの姿が人々にどのように映っているのかという外側の視点を自分のなかで育てなければいけないという戒めです。世阿弥は舞に係る三つの視点を述べています。まずは「我見(がけん)」です。役者自身の視点です。つぎは「離見」です。舞台を見る観客の視点です。そして三つ目の視点が「離見の見」です。観客が舞台上の演者を見る視点を演者自身もつ状態です。我見では目の前や左右を見ることはできますが、自分の後ろ姿や演じている姿は見ることはできません。離見では演者の見えない所まで見る事が可能になります。そして離見の見をもつと演者は自分が見ているものだけでなく、演じている自分の姿も見ることになります。自身の演技を高いところから眼下に見る意識を持つことの効用は色々なことに活用できるはずです。

意図や打算なく、相手を思いやるその一心から起こる行動は人の心を打ちます。「人からよく思われたい。人からいい評価を得たい。」と自分本位である限りこうした行動は生まれません。「わたしは〇〇役である。だから・・・したい。」と自分が起点の考えにとらわれていると舞台全体を見る目は養えません。その一方で自分から離れ、もう一人の自分が少し離れた後方から全体を見渡すような意識が持てると、難しいと思われることにも冷静に対応できるはずです。世阿弥は自分自身を離見で眺める視点をもつ極意を目前心後(もくぜんしんご)と伝えています。「目は前に向けながら心は後ろに置きなさい」と

いう意味です。背中に意識を張ることで。巧みなノールックパスを出すサッカー選手のように、俯瞰的(ふかんでき)にピッチの様子をつかめる人は背中の感覚がひらいているのかもしれない。

さて、私は始業式・入学式からここまでの皆さんの様子を見ていて、とりわけ三年生の姿に頼もしさを強く感じています。二か月も経ちませんが学校を大切にしている行動にあちこちで出会いました。一年生を迎えるに当たり準備登校では式場を整えるために献身的に動きました。集会では凜(りん)とした佇(たたず)まいで入場・整列・退場をしています。階段は片側に寄って通行しています。給食・清掃活動は物音ひとつ立てずに静かに黙々と取り組んでいます。廊下や教室がひと際きれいです。授業中は各担当の先生の意図を汲んで学習環境を整えています。例えば大型テレビの映像が見つらいことに気付いた窓際の生徒が誰に頼まれるでもなく静かにカーテンを閉めます。来校者と温かい挨拶を交わしてくれます。そして体育祭での活躍ぶりです。全員が「楽しめる」体育祭を誰よりも真剣に考え実践してくれました。

もちろん、一・二年生もここまでしっかり生活しています。しかし三年生の水準には達していません。過ごした時間が多いから？そうではありません。学校づくりに真剣に加わろうとしてくれているからです。そして学校全体のことを考えて、その場その場で最適な働きかけをしてくれるからです。最上生が範を示す学校は健全です。しかも口ではなく背中であらゆる三年生の姿は誇らしいです。学校を強くする実践をさらに広げてほしいです。一・二年生は三年生のあとを追い、やがては乗り越えてください。